

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(5)
講題：日本論探求：武士道與天皇制・神道

簡曉花
(2025. 10. 16)

摘要

本演講主題為「日本論探求：武士道與天皇制・神道」，主講人簡曉花教授以宏觀的比較視野梳理武士道的思想譜系，並論述天皇制的歷史演變與神道的宗教文化意涵，帶領聽眾理解日本文化如何在歷史長河中建構出獨特的價值體系與社會秩序，及它們對日本近現代社會影響深遠的原因。進而分析日本各個時代的思想與制度的互動，提供當代的跨領域及延伸應用的思考。

首先從新渡戶稻造(1862-1933)的《武士道》、露絲・班乃迪克(Ruth Benedict, 1887-1948)的《菊花與劍》等著作，談起近代日本知識人的「日本論」(文化論)的源流，並分析東洋與西洋世界如何形塑「日本性格」的結構，以及探討日本各時代的武士精神；主要釐清武士道作為倫理、修養、行動規範的核心精神，涵蓋忠誠、誠信、勇氣、仁愛、禮儀、名譽與自制等德行，這些思想德行不但支撐著武士階層的行動準則，也在近代日本轉化為企業治理與社會倫理的指標的過程中，成為戰後經濟與社會組織文化中可觀察的價值。

其次，主講者探討自記紀神話奠基的「萬世一系」天皇之政治象徵，到近世以降的權力授權與名分秩序，再到戰後《日本國憲法》確立的「象徵天皇」定位，展示天皇制如何在宗教儀典、國民教育與國家認同之間形成連動，並在外交、公共儀式與文化再生產中，持續扮演凝聚社會情感的角色，點出日本當代社會關注皇位繼承與制度正當性的議題。

宗教文化層面，主講者綜述神道的基本結構與實踐樣態，舉出八百萬神的自然、祖靈信仰、禊與祓的淨化觀、神社祭祀與年中行事，以及三種神器在王權象徵與國民文化中的意義。分析神道既非單一教義之宗教，卻以儀式、空間與日常實作滲透社會生活，並與天皇制相互嵌合，構成日本社會長時間的精神底色與文化記憶場域。

最後，主講者以神道提供神聖性基礎、武士道強化忠君思想，以支撐天皇制，再到戰後的社會變化與追求和平方向，武士道、天皇制與神道也轉化成各種不同的角色，例如：武士道精神提供日本現代社會的正向價值（誠信、責任、敬業），也被轉譯為企業倫理與運動精神；天皇制則維持其象徵性，在具有推動公共議題與災後慰問的柔性外交功能；而神道則從意識形態轉為文化交流，透過祭典促進國際文化交流。本講座以思想、制度與文化三軸線並陳，從歷史、政治結構與宗教的角度理解日本文化的真隨，這些日本文化的演化亦成為當代日本國民情感與文化外交的重要觀點。

關鍵詞：日本論、比較思想、武士道、天皇制、神道

徐興慶 整理

2025.10.17

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(5)
講題：日本論への探求-武士道と天皇制・神道

簡曉花
(2025. 10. 16)

要旨

本講演のテーマは「日本論の探求—武士道と天皇制・神道」である。講師の簡曉花教授は、比較文化的かつマクロな視野から武士道の思想系譜を整理し、天皇制の歴史的展開と神道の宗教文化的意義を論じることで、日本文化がいかにして歴史の流れの中で独自の価値体系と社会秩序を形成してきたか、またそれらが近現代日本社会に深く影響を与えてきた理由を明らかにする。さらに、各時代における思想と制度の相互作用を分析し、現代における学際的・応用的な思考を提示する。

まず、新渡戸稻造（1862-1933）の『武士道』およびルース・ベネディクト（Ruth Benedict, 1887-1948）の『菊と刀』などの著作を起点として、近代日本の知識人による「日本論」（文化論）の源流を辿る。そして、東洋と西洋の世界観がどのように「日本的性格」の構造を形づくってきたかを分析し、さらに各時代の武士精神を探究する。とりわけ、倫理・修養・行動規範としての武士道の核心精神——忠誠・誠実・勇気・仁愛・礼儀・名誉・自制——を明確にし、これらの徳目が武士階層の行動規範を支えるのみならず、近代日本において企業統治や社会倫理の基準へと転化し、戦後の経済・社会組織文化においても観察される価値となつたことを指摘する。

次に、講師は『記紀神話』に基づく「万世一系」の天皇を政治的象徴として位置づける起源から、近世以降の権力授与と名分秩序、さらに戦後の『日本国憲法』によって確立された「象徴天皇」制度に至るまでを検討する。天皇制が宗教儀礼・国民教育・国家的アイデンティティの間でどのように連動してきたかを示し、外交・公共儀式・文化的再生産の領域において社会的情動を統合する役割を果たしてきたことを論じる。また、現代日本社会が皇位継承および制度的正当性の問題に強い関心を寄せている点を指摘する。

宗教文化の側面では、神道の基本構造と実践形態を総括し、八百万の神に象徴される自然・祖靈信仰、禊と祓の浄化観、神社祭祀や年中行事、さらに三種の神器が王権象徴および国民文化において持つ意味を具体的に紹介する。神道は単一教義の宗教ではないが、儀礼・空間・日常実践を通じて社会生活に深く浸透し、天皇制と相互に嵌合しながら、日本社会の長期的な精神的基層および文化的記憶の場を形成してきたことを明らかにする。

最後に、講師は、神道が天皇制の神聖性を支える宗教的基盤を提供し、武士道が忠君思想を強化することで制度を支えた歴史的構図を整理する。その上で、戦後社会の変化と平和志向の中で、武士道・天皇制・神道がそれぞれ新たな役割に転化していく過程を論じる。たとえば、武士道精神は誠実・責任・勤勉といった日本現代社会の肯定的価値として継承され、企業倫理やスポーツ精神に翻訳されている。天皇制は象徴性を保持しつつ、公共課題の推進や災後慰問など「柔らかな外交」機能を果たしており、神道はイデオロギーから文化交流の媒介へと転じ、祭礼を通して国際的な文化交流を促進している。

本講演は、思想・制度・文化という三つの軸線を並行的に扱い、歴史・政治構造・宗教の観点から日本文化の本質を多面的に理解するものである。日本文化のこうした展開は、現代日本における国民的情感および文化外交を考察する上でも重要な視座を提供している。

キーワード：日本論、比較思想、武士道、天皇制、神道

中国語要旨・まとめ 徐興慶

日本語翻訳 徐興慶

2025.10.17